

# 國學院大學学術情報リポジトリ

## 〔談話室〕 海外生活と言葉

|       |                                                                                                                         |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-05<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 進藤, 久乃, Shindo, Hisano<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/00000745">https://doi.org/10.57529/00000745</a>                                       |

## 海外生活と言葉

進藤久乃

博士課程に在籍していた二〇〇六年から二〇〇九年、フランスのリヨンに滞在した。帰国した後も、引率業務や資料収集、シンポジウムへの参加などのために、一、二年に一度はフランスその他海外の国へ行く機会があった。半分以上の時間を仕事や研究に費やし、毎度何かしらのハプニングはあるが、それなりに満喫していたように思う。それがここ数年、コロナ禍の影響で、外国に行く機会がなくなってしまった。

二十代半ばまでは、海外へ行くことに慣れていたわけではない。高校でフランス語の勉強を始め、大学でフランス文学科に進学したものの、修士課程を終えて渡仏するまで、ほとんど国内から出たことはなかった。語学を上達させるためには、一、二年の留学よりも、地道な勉強の方が効果的であると考えていたし、時と場所を越えて人の心に届くのが文学作品の醍醐味だと思っていた。

留学当初は、語学の上達と研究のために来たのだから、遊んでいてはいけないという意識が強かった。とはいえそんなに頑なになっても、できることには限りがある。ひと通りのトラブルを経て生活に慣れてくると、住み慣れた環境との違いに目を向け、楽しむことができるようになった。例えば日本の六月は蒸し暑く、雨に濡れた若葉の匂いが立ち込めるが、湿気の少ないフランスでは、眩しい太陽の光があらゆるものの色を鮮やかに際立たせる美しい季節だ。さらには旅行に行ったり、絵画教室に通ってみたり、色々なことを経験する機会を意識的に作るようになった。

幸い、研究上あらゆる面で、留学したことの意義は大きかった。フランス語の中で生活することが外国語運用の訓練になったことはもちろん、書店や図書館で日本では見ることのできない資料を発見することは大きな喜びだった。何気

なく行つてみた古典演劇は、それまで興味のなかつた韻文の美しさを教えてくれた。当時は學業に直接結びつくとは思つていなかった経験が、いまフランス語やフランス文化の授業を担当する上で役立っている。そして、未熟な留學生の意見でも、真剣に耳を傾け理論的な方向へ導いてくれた指導教授や、いつも助けてくれた友人たちとの交流は何ものにも代え難い。

それに加え、言葉と文學に対する向き合い方も変わったように思う。それまでは、言葉——とりわけフランス語——は自分の外側にあつた。言いたいことをフランス語に翻訳しようと苦戦した時期もあれば、フランス語の構文や決まり文句に表現内容を合わせようとすることもあつた。フランス文學も、自分が根ざしている文化から遠く離れたものであるからこそ心惹かれ、研究しようという氣になつたのだと思う。でも、フランス語が話されている環境に身を置いたからなのか、その時期に留學を含め様々な出来事を経験したからなのか、ある程度の距離を保つて研究していたはずのフランス語やフランス文學作品が、自分の内面に深く結びついたものになつたような氣がした。

言葉は表現する者の思考から切り離されたものではなく、両者は深く結びついているということは自明のことだし、研究においても、その傾向が顕著な作家や詩人にとりわけ興味を持つてきた。それでも留學当初の自分は、自身の内面を巻き込まずに外国語を上達させることができると思つていたわけで、それはすいぶん傲慢な考えだつたと思う。そもそもその頃の自分の閉ざされた心には、楽しむ余裕もなかつたのではないか。

文學は國境を越えて人の心を動かし、語學の習得のためには地道な努力に勝るものはないと今も信じている。でも、海外へ行くことについての考え方は大きく變化した。學生たちには、特に目的がなくても、実はそこまで外国語學習に熱意はなくても、知らない場所に行つてみたいという氣持ちのままに、思い切り楽しんでほしいと思う。今の狀況が落ち着いて、誰もが会いたい人に会いに行き、行きたい場所に自由に行くことができる日が一刻も早く戻つてほしいと願うばかりである。